外部評価委員会
評価結果報告書
（第１期中期計画期間）

平成２５年６月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
（東京都健康長寿医療センター研究所）

ま え が き

東京都健康長寿医療センター研究所は、その前身たる東京都老人総合研究所と、高齢者専門の急性期病院である東京都老人医療センターとが一体化し、地方独立行政法人として平成２１年に再スタートをきりました。

地方独立行政法人法においては、設立団体が策定した中期目標を達成するための中期計画をあらかじめ定め、当該中期計画に基づき事業を実施する必要があります。当研究所に関しては、中期計画の大枠として、１）高齢者の健康維持や老化・老年病の予防法・診断法の開発等の研究を支える観点から老化のメカニズムや老化制御などの基盤的な研究を実施するとともに、高齢者の健康長寿と福祉に関して、疫病予防や介護予防等の視点から、疫学調査や社会調査などによる社会科学的な研究を実施する、２）臨床部門に設置されている臨床研究推進センター、治験管理センター、高齢者バイオリソースセンターと連携し、基盤的な研究及び社会科学的な研究の成果を活かして、重点医療分野等の病因・病態・治療・予防の研究を積極的に実施する、ということが定められています。

当研究所では、中期計画を着実に実行するため、病院部門における重点医療（血管病・高齢者がん・認知症）に寄与する研究の実施や、老年学・老年医学の研究の推進を通じて、高齢者の予防・医療・介護の諸問題に包括的に取り組み、臨床への実用化や社会還元を進めてきました。

このたび、当研究所の設立団体である東京都が定めた第１期中期目標に基づく第１期中期計画が最終年度を迎えたため、第１期中期計画期間全体を通しての研究チーム毎の研究計画及び成果に関して、外部評価委員による評価をお願いしました。

委員の皆様方には、大変ご多忙な中、研究所の今後のために貴重なご意見やご助言を賜り、心より感謝申し上げます。いただきましたご意見やご助言を踏まえ、第２期中期目標及び中期計画の達成を目指して今後も研究を進めていく所存です。

都民の皆様、ご関係の皆様には、今後とも当研究所の活動にご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
（東京都健康長寿医療センター研究所）
センター長　　井　藤　英　喜

外部評価委員会の実施状況

○自然科学系及び社会科学系ともに、書面による審査を実施

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会　委員名簿

自然科学系研究外部評価委員会

区　分	氏　名	所属・役職名
学識経験者	新井（あらい）　平伊（へいい）	順天堂大学医学部・大学院医学研究科教授
	石井（いしい）　直明（なおあき）	東海大学　医学部　教授
	下門（しもかど）　顕太郎（けんたろう）	東京医科歯科大学大学院・医歯学総合研究科血流制御内科学分野教授
都民代表	小島（こじま）　正美（まさみ）	毎日新聞社　生活報道部　編集委員
行政関係者	枦山（はぜやま）　日出男（ひでお）	東京都福祉保健局　施設調整担当部長

社会科学系研究外部評価委員会

区　分	氏　名	所　属
学識経験者	太田（おおた）　喜久子（きくこ）	慶応義塾大学　看護医療学部　部長
	長田（おさだ）　久雄（ひさお）	桜美林大学大学院　老年学研究科　教授
	安村（やすむら）　誠司（せいじ）	福島県立医科大学　医学部　公衆衛生学講座教授
都民代表	本田（ほんだ）　麻由美（まゆみ）	読売新聞　東京本社　編集局　社会保障部記者
行政関係者	枦山（はぜやま）　日出男（ひでお）	東京都福祉保健局　施設調整担当部長

外部評価委員会　評定総括表

【各5点満点】

「自然科学系」・・・ 遠藤玉夫（副所長）

順位	チーム名 （リーダー名）	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	3	1	1	
5	老化機構研究チーム （遠藤　玉夫）	**4.4**	**4**	**3**	**4**	**3.9**
3	老化制御研究チーム （田中　雅嗣）	**4.6**	**4.4**	**4.2**	**4.4**	**4.4**
4	老年病研究チーム （重本　和宏）	**4.6**	**4.4**	**3.6**	**4**	**4.23**
1	老年病理学研究チーム （丸山　直記）	**4.8**	**4.8**	**4.2**	**4.6**	**4.66**
2	神経画像研究チーム （石渡　喜一）	**4.4**	**4.8**	**4**	**4.2**	**4.5**

「社会科学系」・・・ 高橋龍太郎（副所長）

順位	チーム名 （リーダー名）	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	2	2	1	
2	社会参加と地域保健研究チーム （新開　省二）	**4.2**	**3.8**	**4**	**4.6**	**4.06**
1	自立促進と介護予防研究チーム （粟田　主一）	**4.4**	**4.8**	**3.8**	**4.4**	**4.33**
3	福祉と生活ケア研究チーム （石﨑　達郎）	**4.2**	**3.8**	**3.8**	**3.8**	**3.86**

自然科学系(Ａ系)報告

東京都健康長寿医療センター研究所（自然科学系）の外部評価報告について

自然科学系　外部評価委員会
委員長　下門　顕太郎

平成２４年度をもって、東京都健康長寿医療センター研究所が地方独立行政法人として定めている第一期中期計画の最終年度を迎えたことに伴い、同研究所における自然科学系の老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老年病研究チーム、老年病理学研究チーム、神経画像研究チームの５チームについて、第一期中期計画全体についての評価を行った。評価に当たっては各評価委員が、あらかじめ定められた評価項目及び評価視点につきコメントを付した評価を行った。また委員長が全体の意見の総括を行った。

① 老化機構研究チーム

本チームは、研究所がオリジナリティの高い成果を上げるため基盤となる部門である。糖鎖を中心にした老化や高齢者の疾患の分子機構解明やプロテオームなど基礎的研究に立脚した新たなバイオマーカーの創出など、本研究所の設立の趣旨にそった独創性の高い研究が行われている。基礎研究であるため、行政・地域・産業等の施策への貢献・反映は大きいとはいえないが、学問的な意味では国内外に本研究所の存在感を示すのに大きな役割を果たしている。今後、病院各科や研究所の他部門との連携を更に密にして、認知症や骨粗鬆症などの研究の発展を基礎から支えることが期待される。

② 老化制御研究チーム

実用化に近い基礎研究が計画されており、実際に成果を上げている。全エクソン領域の塩基配列の研究は、病院部門から高齢者の試料を得て、行われている長期的視点に立った本研究所ならではの研究と言える。科学研究費獲得の数・額が多く、費用対効果も高い。短期的な成果を目指すテーマもあるが、センターである利点を生かして、長期的視点に立った研究にも力を入れるのが好ましい。産業化が見込める研究が行われ、それを支援するシステムが整備されたことは評価できる。公的な医学生物学の研究所で行われた研究が実際に実用化された成功例は少なく、全国のモデルケースとなることが期待される。

③ 老年病研究チーム

高齢社会が抱える骨粗鬆症、サルコペニア、早老症、再生医療など重要な病態の解明や治療法の開発を目指して魅力的な研究計画が立てられている。血管医学グループ、運動器医学グループは独創的・新規的な研究を行い、生活習慣病グループは多くの施設と連携研究を行っており、活動的で将来性のあるチームである。また、意欲的に論文発表・

学会発表を行っているが、行政・マスコミなどへの働きかけは不十分なところがある。社会にとって成果が期待される部門であり、今後さらに充実させていくことが必要である。

④ 老年病理学研究チーム

臨床に結び付く基礎研究も多く、基礎から臨床までバランスのとれたチームであり、極めて質の高い成果を出している。豊富な剖検例を基にした認知症をはじめとする神経に関する病理学は、研究所内のみならず国内外の施設とネットワークを構築して価値の高い研究を計画し、遂行しており、高齢者の癌に関する研究も独創的である。リソースバンク事業をはじめとする研究の多くが、国内外の施設との共同研究であり、世界中の老年医学研究に対する貢献は大きい。全体的に実用化に近い成果が見受けられ、パーキンソン病など高齢疾患の予防・治療に貢献できそうな研究もあり、今後への期待も大きい。高齢者にやさしいホルモン療法、女性の結腸の病態と遺伝子多型の研究など、さらに具体的な成果が出ることを期待したい。

⑤ 神経画像研究チーム

認知症の早期診断は、高齢社会において対応すべき課題であり、そのための独創的な研究が計画されており、病理や病院部門との連携も行われている。質の高い成果も得られており、論文発表・学会発表ともに活発に行われている。また、審議会などに積極的に参加し、行政の施策にも貢献している。社会貢献度が高い研究が多く、重要で期待されるチームであり、研究所の一部門としては、例外的と思えるほど広範で活発な研究が遂行されてきている。今後は、画像診断に関する研究を、世界的な共同研究の枠組みでさらに進めていくことが望まれる。これまでに、新規のリガンドの開発など産業と直結する研究が行われ、それなりの成果は出ているが、リガンドの開発は、企業と連携して今後戦略的に進める必要がある。

まとめ

地方独立行政法人化により、「東京都老人総合研究所」から「東京都健康長寿医療センター研究所」に組織が改編され、研究内容も外からわかりやすい形に整理統合された。また実用化を目指した研究への取り組みも明確になりそのための枠組み作りも進んだ。

超高齢社会において当研究所が取り組むべき課題は多岐にわたるが、限られた予算、マンパワーで世界をリードする老年学研究施設であり続けるには、今後とも研究テーマの選択や研究所内外における連携の強化を含む戦略的努力が必要である。

ニューヨークやパリと並ぶ世界を代表する文化都市である東京都を代表する研究施設として、また高齢化の最先進国である日本の中で最も歴史のある老年学研究施設として、今後 10 年は、これまで以上に充実した活動が求められている。

自然科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●老化機構研究チーム

チームリーダー：遠藤玉夫

各委員の評点	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	5　総合評価
平均点	**4.4**	**4**	**3**	**4**	**3.9**
	5点×3名 4点×1名 3点×1名	5点×2名 4点×1名 3点×2名	3点×5名	5点×1名 4点×3名 3点×1名	

5チーム中　5位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性　　平均4．4点

・認知症と糖鎖の研究では独創性がある
老化のバイオマーカーは臨床研究に結び付く
老化のプロテオーム解析はこのセンターが日本の研究の中心的役割を担っており独創性がある
「活性酸素発生の還元ストレス仮説」はこのセンター独自のもので、独創性がある。

・アルツハイマー病での糖転移酵素とアミロイドβの減少、老化モデルマウスの糖鎖蓄積、酸化ストレス応答の分子修飾、超百寿者のマーカー、活性酸素のリアルタイム画像化法など、すぐれた基礎研究が見られる。

・糖鎖を中心にした老化や高齢者の疾患の分子機構解明やプロテオームなど基礎的研究に立脚したあらたなバイオマーカの創出など、本研究所の設立の趣旨にそった独創性の高い研究が計画されている。

2　研究成果　　平均4点

・筋疾患モデルマウスの作製が当初の年度別計画よりも1年遅れたため、詳細解析まで至っていない。
全般的に意欲的に論文発表・学会発表を行っている。
Klothoに関しては研究成果が出ているものの論文や学会発表にまだ反映されていない。

・アミロイドβの特異抗体の作製、活性酸素のリアルタイム画像化法、老化モデルマウスでの糖鎖蓄積など成果は着々と出ている。

・期間全体としては、質量とも十分な高い論文が発表された。

評点の理由、コメント

●老化機構研究チーム

3　研究成果の還元	平均3点
・基礎研究なので、行政・地域・産業等の施策への貢献・反映・期待感は小さいが、学会など研究の世界で 貢献している（学会への貢献度なども評価基準に加えて欲しい）。 ・基礎研究なので、独創性やその成果を分かりやすく還元することは容易ではないと思うが、新聞やテレビで科学的なトピックになる材料は多い。しかし、そうした材料を提供しようとする努力がまだ足りない。せっかくの基礎研究が具体的にどのような形で社会に役立つかをもう少し分かりやすく解説することも必要だ。 ・期間中他部門との連携が進み、より臨床に近い研究もおこなわれるようになっているが、部門の性格上、行政や地域への貢献ができにくい。	

4　今後の展望と発展性	平均4点
・老化とどう結びついていくのか不明瞭な研究もあり、それを明確にして研究を継続すべき。 ・活性酸素のリアルタイム画像化法やアミロイドβの特異抗体の作製などが今後、どのように実用化されていくのか興味深い。しかし、実用化へのタイムスケジュールがはっきりと見えない。他の研究機関とどのように連携し、いつごろまでにどの分野で実用化が可能なのかをもっと明確に示してもよいのではないか。 ・本研究所が、真の意味でオリジナリティの高い成果を上げるためには中心的役割を果たす部門である。病院各科や研究所の他部門との連携をさらに密にして、認知症や骨粗しょう症などの研究の発展を基礎から支えることが望まれる。	

5　総合評価	平均3．9点
・「老化機構」という研究チームだが、研究内容は老年性疾患や生活習慣病に焦点を当てているものが多く、老化制御の研究チームとの違いが分からない。 老化の分子メカニズムなど老化の基礎研究に焦点を当てた研究編成がセンターとして必要では。 ・どの研究もすぐれ、他の研究機関との連携も十分にあると思うが、長い目でみて、それらの基礎研究が実用化にどう結びついていくかの道筋をもっと分かりやすい形で示すことが必要だ。これは全体に言えることだが、外部評価委員以外の専門家との公開討論もあったほうがもっと論点が整理できるのではないかと感じた。 ・基礎部門であり、なかなか成果を還元することは難しいと思われるが、今後臨床部門との連携で発展を期待する。 ・研究所の存在を支える独創的で質の高い基礎研究を行っている。	

6　評価を終えて

自然科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●老化制御研究チーム

チームリーダー：田中雅嗣

各委員の評点	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	5　総合評価
平均点	**4.6**	**4.4**	**4.2**	**4.4**	**4.4**
	5点×4名 3点×1名	5点×2名 4点×3名	5点×1名 4点×4名	5点×2名 4点×3名	

5チーム中　3位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性　　平均4．6点

・全エクソン領域の塩基配列の研究は長期的視点に立った独創的で将来性のある研究
高齢者の試料が必要なことから病院との連携もしっかりとおこなっている。
科学研究費獲得の数・額が多く、費用対効果も高い。

・加齢性疾患に関連する遺伝子の多型・変異研究、また運動能力に関連する機能的多型の解明、ミトコンドリア病の遺伝子診断やピルビン酸投与の有効性、ビタミンCによるCOPDの予防・治療研究などすぐれた研究が着々と出てきた。

・老化機構より、実用化に近い基礎研究が計画され、実際に成果をあげている。 老化モデルマウスの研究はビタミンCの生体における役割解明のほか、ビタミンCの医薬品応用に広がりつつある。水素水、CoQ10，認知症の新しい薬、自律神経刺激による疼痛制御なども同様に実用化が見込める。 他部門や病院との連携も系統的に行われている。

2　研究成果　　平均4．4点

・健康長寿ゲノム探索は当初の目標を達成しており、学術的にも重要な知見が得られている。
全般的に意欲的に論文発表・学会発表を行っている。
1つの論文投稿で完結してしまう研究もあり、長期的な研究が望まれる。

・ミトコンドリア病のピルビン酸ナトリウム療法は今後、臨床試験に入る予定で楽しみだ。全エクソン解析は研究所ならではの成果だといえる。

・優れた論文が発表されているが、やや実用化に重点が行き過ぎているかもしれない。

評点の理由、コメント

●老化制御研究チーム

３　研究成果の還元	平均４．２点

・基礎研究が多いので、行政・地域・産業等の施策への貢献・反映・期待感は小さいが、学会など研究の世界で貢献している（学会への貢献度なども評価基準に加えて欲しい）。
ビタミンCの研究から商品が創出され、産業界に貢献した。

・興味深いテーマが多いせいか、他のチームに比べるとメディアに取り上げられた頻度が高い。患者会との交流や市民公開講座など情報発信力もまずまずよいが、主体的に動けば、もっと社会に広くアピールできたと思う。他の国立研究機関では、研究を論文として発表するたびに各メディアにその要旨を送っているところがある。そういう努力をもっとやってほしい。

・実用化が見込める成果が多くでている。産業化のシステムが整備されたことも評価できる。

４　今後の展望と発展性	平均４．４点

・毎年研究テーマが変わっていて、方向性が良く見えない研究もある（線虫、CoQ，水素）。
（センターである利点を生かして、長期的視点に立った研究に力を入れて欲しい）。
線虫の研究をマウスなどに応用するための研究支援体制がセンターに整っているか疑問。
（線虫の専門家がマウスを扱えるとも思えないし、遺伝子組み換えマウスを作り、機能解析をする時間的余裕がマウス研究者にあるのか疑問）

・アルツハイマー病の脳でのシトルリン化たんぱく質の早期出現が早期診断薬に結びつくような予感を思わせる。いつ、どのようなタイムスケジュールで実用化を目指すのか他の研究機関との連携も含め、実用化のための工程表を描いてほしい。

・トランスレーショナルリサーチが真の意味で実用化されるための原動力となることが期待される。実用化されたものについては、商業化までを研究所で行うのではなく、企業とタイアップして商品価値を高める必要がある。重点的に取り組むプロジェクトを絞る必要があるかも知れない。

５　総合評価	平均４．４点

・どの研究も高いレベルにありますが、毎年テーマが変わるようなものもあるので（1つの論文を書いて完結のようなもの）、長期的な計画を立てて、他ではできない研究をしていただきたい。
線虫を使って寿命に関係する遺伝子を見つけたのは大きな成果。
センターの独創的なテーマになる可能性がある。
これを継続し、哺乳動物でも実証するとともに、ぜひこれらの遺伝子が老化にどのように関わるか、その分子メカニズムを解明して欲しい。
（これができるためには、研究者同士の連携、センターからの人的・経済的な支援が必要）

・高齢女性の血しょう中ビタミンCと筋力、運動との関連、ビタミンCによるCOPDの予防、PAD4のリウマチ診断薬、皮膚刺激による失禁改善、認知症の早期診断薬など実産業化が見込める研究が行われ、それを支援するシステムが整備されたことは評価できる。公的な医学生物学の研究所で行われた研究が実際に実用化された成功例は少なく、全国のモデルケースとなることが期待される。実用化と結びつく研究が多いので、今後の成果を大いに期待したい。研究自体が画期的かどうかよりも、都民にどれだけ有用な成果が出せるかが重要。実用化できそうなものの中で優先順位を決め、重点的に実用化を目指すことが必要だと感じた。

・共同研究が多い印象も受けるが、独自性の高いprojectもあり、全体としてのactivityは高いと思われる。今後は成果を一つ一つ確実に結実させて頂きたい。

・産業化が見込める研究が行われ、それを支援するシステムが整備されたことは評価できる。公的な医学生物学の研究所で行われた研究が実際に実用化された成功例は少なく、全国のモデルケースとなることが期待される。

６　評価を終えて

自然科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病研究チーム

チームリーダー：重本和宏

各委員の評点	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	5　総合評価
平均点	**4.6**	**4.4**	**3.6**	**4**	**4.23**
	5点×3名 4点×2名	5点×2名 4点×3名	4点×3名 3点×2名	5点×1名 4点×3名 3点×1名	

5チーム中　4位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性　　平均4．6点

・血管医学グループ、運動器医学グループは独創的・新規的な研究をおこなっている。
生活習慣病グループは多くの施設と連携研究を行っている。

・ウエルナー症候群の病体把握と診断基準、サルコペニアなど筋萎縮疾患の治療につながるモデルマウスの作成などすぐれた研究は評価できる。外部機関との連携も充実している。

・高齢社会が抱える骨粗しょう症、サルコペニア、早老症、再生医療など重要な病態の解明や治療法の開発を目指して魅力的な研究計画が立てられている。

2　研究成果　　平均4．4点

・研究の基盤整備が出来た段階のものもあるが、論文発表や学会発表が活発に行われるようになった。

・遺伝子情報を活用した骨粗鬆症診療システムの開発、重症筋無力症のモデル動物を使った治療薬の開発など成果が出ている。

・それぞれのプロジェクトが開始されてから十分な期間が経過していないこともあり、質的量的にきわめてすぐれた成果が得られているとまでは言えない。モデルマウスを用いた骨格筋代謝の可視化など、今後大きなブレイクスルーが期待できる。

評点の理由、コメント

●老年病研究チーム

3　研究成果の還元	平均3．6点

・意欲的に論文発表・学会発表を行っている。
行政・マスコミなどへの働きが不十分。

・重要な研究をやっている割には、外部の人たちに研究成果を伝える努力が足りないように思える。研究成果を文書にまとめるときにも、どういう点が誇れるかをもっとわかりやすい形でアピールしてもよいのではないか。

・再生医療のための標準化に関する研究や、早老症の診断基準作成など行政に対する貢献度は評価できる。

4　今後の展望と発展性	平均4点

・血管医学グループではiPS細胞の確立、生活習慣病グループでは多くの機関との連携と将来性のある研究を行っているが、研究員が少ないことから研究の進展が遅くなる可能性がある。
運動器医学グループの基礎研究は今後の発展に期待できる。

・運動器医学研究では臨床とも結びつく成果が出ており、今後が楽しみだ。他施設との連携では、どこまでどういう点で研究所自体が貢献しているかが分かるようにし、具体的な実用化に向けた工程表をつくってほしい。

・社会にとって成果が期待される部門であり、今後さらに充実させることが必要である。このチーム内に認知症に関するプロジェクトも立ち上げて、病理が画像、病院の部門連係した研究を行うことも選択肢かもしれない。

5　総合評価	平均4．23点

・血管医学グループ、運動器医学グループは独創的・新規的な研究をおこない、生活習慣病グループは多くの施設と連携研究を行っており、活動的で将来性のあるチームである。

・骨粗鬆症の診断法の開発などすばらしい研究があるのに、広報が弱いように思う。これは将来、都民に有用だと思う研究成果をもっと訴えていってほしい。

・研究領域を絞り、より専門的な研究として発展させている印象がある。成果の臨床への応用を期待する。

・将来　研究所の顔となることが期待される部門であるが、現時点では発展途上である。

6　評価を終えて

自然科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病理学研究チーム

チームリーダー：丸山直記

各委員の評点	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	5　総合評価
平均点	**4.8**	**4.8**	**4.2**	**4.6**	**4.66**
	5点×4名 4点×1名	5点×4名 4点×1名	5点×2名 4点×2名 3点×1名	5点×3名 4点×2名	

5チーム中　1位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性　　平均4．8点

・高齢者のガン研究はこのセンターならではの研究であり、必要性が高い。
科学研究費の数・金額が多く、費用対効果も良い
外部との共同研究も多い。

・老化過程におけるテロメアの定量測定、その短縮を染色体の不安定性と関連する画像化、神経難病のニューロン活動の解明、国際的に機能し始めた高齢者のブレインバンクなど独創性・新規性にすぐれた研究が見られる。

・豊富な剖検例を基にした認知症をはじめとする神経に関する病理学は、研究所内のみならず国内外の施設とネットワークを構築して価値の高い研究を計画し、遂行している。高齢者の癌に関する研究も独創的である。

2　研究成果　　平均4．8点

・臨床に結び付く基礎研究も多く、基礎から臨床までバランスの取れたチーム。

・テロメア短縮の研究で肝道閉鎖症の患者の早期移植の正当性を明らかにしたり、レビー小体の中枢神経以外での発症の病変解明など成果は着々と出ている。

・きわめて質の高い成果を出している。

評点の理由、コメント

●老年病理学研究チーム

3　研究成果の還元	平均4．2点

・論文発表・学会発表ともに活発に行っている。
日本全国の病院とのネットワークも構築して活動している。
行政などへの提言やマスコミへの宣伝は不十分。

・素晴らしい独創的な研究が数多くある割には、メディアで報道される頻度は低いように思う。もっと成果をアピールすべきだ。テロメア研究は間違いなく科学ニュースになる。

・リソースバンク事業をはじめとする研究の多くが、国内外の施設との共同研究であり、世界中の老年医学研究に対する貢献は大きい。

4　今後の展望と発展性	平均4．6点

・高齢者ブレインバンクは体制が整ってきたが、集めた試料を研究者がどのように活用していくかはこれからの課題で、そこまでの議論がなされていないように感じる。
研究の方向性（最終目標）が不明確。

・豊富な高齢者の剖検材料を生かした研究はすぐれ、今後の発展に期待できる。何を実用化させるのか優先順位をつけて、成果を目に見える形で都民に還元していってほしい。

・リソースバンク事業を今後も発展させ、国内外の研究者と共同して加齢および高齢者の疾患の研究を推進することが望まれる。現在の研究特に癌に関する研究は、現在の研究者の優れた才能に依存する部分が大きいように思われる。戦略的に次世代を養成する必要があるかもしれない。

5　総合評価	平均4．66点

・外部とのネットワークがしっかりしており、研究費獲得、論文や学会発表も順調。
ネットワークの中で得られた情報や試料をどのように活用するかを厚生労働省などと連携して模索すべき。

・全体的に実用化に近い成果が見受けられ、パーキンソン病など高齢疾患の予防・治療に貢献できそうな研究もあり、今後への期待は大きい。高齢者にやさいしいホルモン療法、女性の結腸の病態と遺伝子多型の研究など、さらに具体的な成果が出るのを期待したい。

・全国の脳研究発展のために重要な存在と思います。今後のより充実と研究への貢献を期待します。

・長年の蓄積に裏打ちされた、他の追随を許さない優れた研究が行われている。

6　評価を終えて

自然科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●神経画像研究チーム

チームリーダー：石渡喜一

各委員の評点	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	5　総合評価
平均点	**4.4**	**4.8**	**4**	**4.2**	**4.5**
	5点×3名 4点×1名 3点×1名	5点×4名 4点×1名	5点×2名 4点×1名 3点×2名	5点×2名 4点×2名 3点×1名	

5チーム中　2位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性　　平均4．4点

・脳のイメージングの技術とガン診断法は脳障害・ガンが増加していることから必要性が高い。
新しい試みを積極的におこなっている。
脳機能・形態画像データベースは独創的。
病院との連携がしっかりしている。

・アミロイドイメージングによる認知症の早期診断、がんの増殖能を評価する診断法など、この研究所ならではの独創性が見られる。

・認知症の早期診断は、高齢社会において対応すべき課題であり、そのための独創的な研究が計画されている。病理や病院部門との連携も行われている。

2　研究成果　　平均4．8点

・論文発表・学会発表ともに活発に行っている。

・PETを用いた認知症の早期診断はもちろん、世界初のPET創薬の臨床試験など成果は順調に出ている。

・質の高い成果を得ている。

評点の理由、コメント

●神経画像研究チーム

3　研究成果の還元	平均4点

・審議会などに積極的に参加し行政の施策に貢献している。
社会や産業界への貢献・期待も大きい。

・シンポジウムや講演会などで外部との接点はあるが、もっとマスコミへのアピールがあってもよい。画像診断がどこまで進んでいるかに社会の関心は高い。記者へのレクチャーを通じて、ニュースになりそうな情報をもっと提供してほしい。

・新規のリガンドの開発など産業と直結する研究が行われ、それなりの成果が出ている。実際に製品化されたものはなく、本研究所で独自に新規リガンドを作成し、商品化に結び付けるというアプローチそのものを見直す必要があるかもしれない。

4　今後の展望と発展性	平均4．2点

・画像診断は社会への貢献度が高く、研究継続の必要性、発展性は高いが、実用化までには多くの段階をクリアしなくてはならず、最終目標到達期限が不明瞭なものもある。

・認知症の早期診断に向けて日本のリーダー的存在として期待できる。長期的な戦略に立ったさらなる継続性に注目したい。

・画像診断に関する研究を、世界的な共同研究の枠組みでさらに進めることが望まれる。リガンドの開発は、企業と連携して戦略的に進める必要がある。

5　総合評価	平均4．5点

・社会貢献度が高い研究が多く、重要で期待されるチーム。

・認知症患者が460万人もいる中、認知症を早期に診断する技術への期待は大きい。その意味でこのチームの研究の重要性はますます高くなっている。これこそが重要だと思う分野に特化して、実用化を急ぐことはできないものかと思う。

・国際的にも最先端レベルの研究として発展して頂けたらと期待しています。

・研究所の一部門としては、例外的と思える広範で活発な研究が遂行された。

6　評価を終えて

・報告書にはマスコミに多数の成果を発表と書いてあるが、資料の中には見つからないが？

自然科学系に対して

評点の理由、コメント

5　総合評価
・「センター全体の総合評価として」 「老人総合研究所」から「健康長寿医療センター」に改名されたことで疾患が研究対象になっても良いとは思いますが、疾患に関しては国内外の多くの研究所・大学・医療機関で行われています。 このセンターの特徴を出すために老化に関わる基礎から臨床までの中での研究に特化すべきと考えます。 世間の注目を集めやすい生活習慣病などの疾患研究が多くなれば、このセンターの特徴が薄れてくると感じました。 「老化機構研究チーム」と「老化制御研究チーム」の違いが不明瞭なので再編も考えては。 老化モデルマウスの作製など、センター独自の特徴ある基礎研究テーマも必要と思われる。 グループによってはマンパワー不足になる可能性があるので、センター全体で支援することが大事 研究者の目線で評価すれば、多くの研究者が頑張って、学会の世界では高い評価を受ける研究がなされているセンターであると思います。今回は東京都の研究所であり、都民に還元すべき研究でなければならないという目線で評価をしていますので、評価が低いチームでも落胆せずに、それぞれの研究に邁進していただきたいと思います。 ※「3. 研究成果の還元」には学会活動も加えて欲しい。(これがないと基礎系は評価が低くなる) ・全体を通して感じたことは、「これだけすぐれた研究成果が出ているのに、メディアに取りあげられる頻度が少ないのが残念だ」ということです。他の研究機関の中には、たびたび記者会見を開いて、いろいろな成果や取り組みを説明しているところもあります。それと同じような試みをなされることを期待したいです。 もうひとつ、研究報告書の作り方が一般向けでないことです。一般の都民が読んでも分かるような言葉で説明した別刷りの冊子があるとよいと思います。そこにフローチャート方式で研究開発のスケジュール工程を載せ、いつまでに何が成果として出てくるかが、ひと目でわかるようになっているとさらによいと思います。

6　評価を終えて

社会科学系(Ｂ系)報告

東京都健康長寿医療センター研究所（社会科学系）の外部評価報告について

社会科学系　外部評価委員会
委員長　長田　久雄

東京都健康長寿医療センター研究所における社会科学系は、社会参加と地域保健研究チーム、自立促進と介護予防研究チーム、福祉と生活ケア研究チームの３チームで構成され、研究を行っている。

このたび、研究所では、平成２４年度をもって地方独立行政法人として定めている第一期中期計画の最終年度を迎えたため、研究所が定めた評価項目及び評価視点を基に第一期中期計画全体についての評価を行い、委員会としてとりまとめたのでここに報告する。

委員の評価について、チーム毎に以下のとおり総括する。

①社会参加と地域保健研究チーム

いずれの研究テーマについても、一定の研究成果が得られ、発表もなされており、その学術的知見は高く評価される。また、研究成果の還元の点でも、第一期中期計画を通してみると、初期には不十分な点もあったが、年度を追う毎に研究成果の還元が確実に行われるようになってきていることが認められる。本チームの研究テーマは、まさに、超高齢社会に突入した日本が抱える解決を迫られている課題そのものであり、その必要性は極めて高く、発展が強く望まれるところである。今後は時代の変化に即して研究内容や重要度などを検討することも必要であり、これを前提として、現在の方向性を継続しつつ発展させていくことが期待される。

②自立促進と介護予防研究チーム

第一期中期目標に対応した研究成果が十分に挙げられており、極めて順調に研究は進行していると考えられる。研究成果の発表は多岐な分野にわたっており、その量は多く、研究レベルも高い。また、研究成果の還元の点では、第一期中期計画の当初においては、委員から、研究成果が具体的に使用され、行政施策などへの反映という形で十分に還元されていないという指摘があったものの、研究の進捗にしたがって、地域貢献、社会貢献が認められるようになったと評価し得る。本研究チームの研究課題は、いずれも社会的必要性や研究成果への期待が高いため、それだけに、今後一層、社会的還元、貢献、普及等が望まれるところである。

③福祉と生活ケア研究チーム

個別の研究内容については、概ね順調に進行していると考えられる。学術的な知見のレベルは十分高く、その成果としての学術論文の発表も一定以上であると認められる。また、

研究成果の還元という点では、積極的な社会的還元が行われている成果もあるものの、委員からは、第一期中期計画の最終年度においても、行政、地域、産業等への施策への貢献、反映という点からはやや物足りないなどの指摘があった。本研究チームでは、個別に研究が実施されている印象があり、それらを有機的に連携して実施するなど、効率的な研究体制を構築するなどの工夫で研究は更に発展する可能性があると考えられる。内容と方法を検討しつつ、社会的還元を意識しながら研究を進めることが望まれる。

社会科学系全体としての総括

社会科学系全体としては、高齢社会における重要な研究課題が多数設定されており、第一期中期計画の最終段階においては、全体として適切な研究方法に基づき、本研究センターの特性を活かし、外部機関とも連携して研究が行われており、研究成果も着実にあがっていると評価できる。また成果の社会的還元も活発に行われており、研究の今後の発展も期待される。社会的な必要性が高い課題が多いために、確実にエビデンスが検証された成果と、それに基づく社会的還元に対する期待は高い。多数の多様な研究課題が設定されているため、社会科学系全体として、たゆまず研究の整理や統合を図り、一層効果的に研究を進めることが望まれる。

社会科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●社会参加と地域保健研究チーム

チームリーダー：新開省二

委　員	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	総合評価
平　均	**4.2**	**3.8**	**4**	**4.6**	**4.06**
	5点×1名 4点×4名	4点×4名 3点×1名	5点×1名 4点×3名 3点×1名	5点×3名 4点×2名	

3チーム中　2位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性	平均4．2点

・社会参加・社会貢献の促進に関しては、極めて社会的要請の高いテーマが取り上げられている。地域における実態の把握と課題の整理と並行して、新しいプログラムを開発し、その効果をRCT試験により評価・検証していることは、妥当性の高い研究手法と考えられる。さらに、社会的孤立の研究については他の研究機関等でも実施されているが、その予防策の提案をしている点で、その独創性・新規性は高い。
　老化・虚弱の一次予防と地域保健に関する研究では、他ではあまり検討されていないバイオマーカーの研究の独自性は高いが、老化における意義を明確にすることが求められる。その他のいずれの研究の目標も妥当であり、必要性も高いと考えられる。また、病院や他チームとの連携もはかられている。

・高齢者の社会参加という意義ある課題について実態把握、プログラム開発・普及に取り組んでいる。縦断的取り組みから、虚弱指標開発、介護認定への効果測定など評価できる。

・本研究チームのテーマは2つある。社会参加のテーマにおいては、社会参加を社会貢献だけでなく、就労、相互扶助、次世代育成、孤立予防、さらには介護予防と結びつけた視点をも含めて研究していることには、必要性と独創性が認められる。地域保健のテーマにおいて、虚弱に焦点を当てていることは有意義で妥当である。自治体、外部研究機関、企業、病院部門との連携も活発に行われている。2つのテーマの下に多くの研究が行われており、各研究の関連性や統合性が十分とはいえない点、血清β2-MGのように、第一期中期目標期間において十分な成果が検証されなかった研究内容などは、今後検討し見直すことが望まれる。

評点の理由、コメント

●社会参加と地域保健研究チーム

2　研究成果	平均3．8点

・いずれの研究テーマについても、一定の研究成果が得られており、その研究成果を発表しており、その学術的知見は高く評価される。両研究テーマ共に目標はほぼ達成していると考える。
　社会的孤立の予防策の提案は評価されるが、その効果検証は十分にはされておらず、「地域包括ケアシステム」の構築の意義、評価などその評価が望まれる。
　バイオマーカーを活用した老化予防のガイドライン作成では、今後の成果の活用の方向性がわかりにくく、成果の意義が若干不明確である。

・成果がみられている。RCTの取り組みも重要である。

・第一期中期計画の期間を通してみると、大震災の影響などもあり、部分的には必ずしも予定された計画通りに研究が進捗しなかった点もあるが、全体としては一貫して着実な研究成果があがっていると評価できる。地域包括的見守りシステムの構築など、今後に発表が期待される成果もあるが、応用的に有用な成果だけでなく、学術的にも価値のある知見が得られていることは、多くの学会・論文発表が行われていることからも裏付けられいると考えられる。最終年度に至って、第一期中期計画において目標とされた研究の成果は、概ね達成されていると認められる。

3　研究成果の還元	平均4点

・本チームの研究成果はいずれのテーマ研究においても多数なされており、行政・地域施策への貢献は大変大きいものと考える。また、国等における研究成果の活用の点でも、大きな役割を演じていると評価できる。

・よく還元されている。

・本チームの研究成果の還元は、第一期中期計画の期間を通してみると、初期には不十分な点もあったが、年度を追う毎に研究成果の還元が確実に行われるようになってきていることが認められる。学術的成果に裏付けられた出版物の刊行、政策提言への寄与、チェックシートの作成・公開、地域包括支援システムの試行、厚生労働省の第二次健康日本21の策定への貢献、自治体職員・都民向けの講演、マスコミを通した報道などを積極的に行っており、都民をはじめ全国民を対象とした還元が行われていると評価できる。本チームはこのように行政や地域施策に大きな貢献をしているが、同時に期待も高いことから、今後も一層、エビデンスに基づいて、有用性と汎用性のある研究成果の還元が期待される。

4　今後の展望と発展性	平均4．6点

・研究の一部については、今後の研究計画の再検討が必要かと考えられるが、全体としての研究の方向性や内容に特に問題はなく、全体として適切であり、その妥当性も高いと考える。
社会参加と地域保健研究チームの研究テーマは、まさに、超高齢社会に突入した日本が抱える解決を迫られている課題であり、その必要性は極めて高く、発展が強く望まれる。

・孤立予防の構造と防御策などさらに発展させてほしい。

・第一次中期計画のはじめの段階では、外部評価委員からは、縦断的研究やそれぞれのテーマの関連性、統合性の検討、東京都の施策への提言に留意した研究の継続が望まれていた。年次を経て研究が進展し、方向性も明確となるに従って、具体的な研究成果やその還元の方法や手段が期待されるようになり、最終年度においては、長期的研究目標が未達成の課題の進展を図り、チーム内での研究の体系づけを行うこと含めて、チームの研究全体を見直しをしつつ研究を進めることが、中期目標の達成に向けた方向性として求められるに至った。現在の研究内容は必要かつ妥当であるが、今後は時代の変化に即して研究内容や重要度などを検討することも必要であり、これを前提として、現在の方向を継続し発展させることが期待される。

●社会参加と地域保健研究チーム

5 総合評価　平均4．06点

・本チームの研究テーマである「社会参加・社会貢献の促進に関する研究」・「老化・虚弱の一次予防と地域保健に関する研究」は、いずれも大変重要な研究テーマであり、その社会的ニーズは高い。そのぞれぞれのテーマ研究の個別研究については、着実にその成果を挙げていると考えられたが、その個別研究の相互関係は明示されておらず、本チームとしての目指す方向性が若干わかりにくい。
　しかし、社会的要請度の極めて高い、大変重要な研究が実施され、その成果は市区町村、都、国、いずれにおいても、有益であるという認識に異論はないと考える。
　本チームの研究成果は高い評価に値するが、敢えて言うと、完成度が高い分、今後の発展の課題を提示して頂けるとよかった。

・高齢社会における高齢者自身の活動性を高めることは必須のことである。そのための方策につながる研究は極めて重要である。今後もさらに発展させてほしい。

・第一期中期計画の期間を通して、全体として重要かつ妥当な研究が行われている。外部研究機関、自治体、企業、病院部門などとの連携も有効に行われている。独創性のある研究だけでなく、地道な取り組みもあり、それぞれに着実に学術的な成果があがっていることは、学会における発表、学術雑誌への論文掲載が積極的に行われていることからも裏付けられる。研究成果は、学術的な公表だけでなく、出版物、チェックリストの作成、政策提言、自治体職員向けの研修、都民向けの講演、マスコミでの報道などを通して、積極的に社会的還元が行われている。今後の中期計画において、本チームの研究の発展性は大いに期待できる。現在の研究の方向性は適切であり、本チームの研究が継続される必要性は極めて高いが、時代の変化に応じた研究内容の見直しの検討や、チーム内での研究や研究成果の有機的、体系的統合を図ることによって、より一層の成果と社会的貢献が期待できると考えられる。

・全体として順調に進んでおり、研究成果も一部をのぞき着実に上がっている。中でも、生きがい就労支援、世代間交流型ボランティア活動、地域包括的見守りシステムなど、これからの社会での期待度は大変高く、一層の社会還元の工夫が期待される。

6 評価を終えて

・中期目標期間における評価、としての評価であるが、「高い完成度」であるためか、今後の課題と方向性の提示が欲しかった。

・第一期中期計画の期間を通して、本チームの研究は、研究所の特性を活かしたものであり、今後の発展が大いに期待される。研究テーマが多様多数であり、研究担当者、リーダーの負担が過剰になることが危惧されるが、重要な課題を着実に研究して成果をあげ、還元していることに敬意を表す。第一次中期計画の初期においては、成果の対外的発信が不十分であるという意見もあったが、年次を経て、研究成果があがり学術的発表、社会的還元が活発に行われるようになった。今後も、縦断的研究の継続、研究チームとしての組織的取り組み、エビデンスに基づく研究成果の様々な社会的還元とその効果の検証などを、研究スタッフの負担が過剰にならないように留意つつ進めてほしい。

社会科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●自立促進と介護予防研究チーム

チームリーダー：粟田主一

委　員	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	総合評価
平　均	**4.4**	**4.8**	**3.8**	**4.4**	**4.33**
	5点×2名 4点×3名	5点×4名 4点×1名	4点×4名 3点×1名	5点×2名 4点×3名	

3チーム中　1位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性	平均4．4点

・本チームの研究ターゲットであるサルコペニア、虚弱、転倒、尿失禁などは、いわゆる老年症候群であり、その要因の解明、効果的な予防プログラムの開発は、極めて重要であることに論を待たない。
　また、要介護の要因解明、介護予防プログラムの開発と確立は、必要性の高い研究テーマであり、その研究方法は独創性・新規性も有している。
　認知症、うつ・自殺に関する研究は、国家的な課題であり、その重大性は言うまでもなく、本研究チームの研究内容は、他の研究機関ではできないような内容となっており、高い独自性が認められる。
　病院部門を含め他の機関等との連携は十分に図られており、全体として適切であると考える。

・意義ある課題をRCT、コホート調査などの方法を駆使して実施されている。

・本研究チームは、サルコペニア、膝痛、虚弱、転倒、尿失禁、口腔機能低下、認知症、うつ、精神的健康度低下の要因を解明し、効果的な予防プログラムを開発し、予防、医療、介護等のサービスを一体的に提供し、高齢者が安全に暮らすことができる地域社会の創出に寄与することを目的としており、高齢社会における重要な課題を、RCTおよび介入を含む縦断的研究等によって研究している。第一期中期計画の経過中には、必ずしも目標との対応が明確でない研究が含まれていたが、全体として、必要性、独創性が高いと認められる。外部の研究機関、自治体、企業、病院部門との連携も活発かつ効果的に行われている。

評点の理由、コメント

●自立促進と介護予防研究チーム

２　研究成果	平均４．８点

・第一期中期目標に対応した研究成果が十分挙げられており、極めて順調に進行していると考えられる。
　その研究成果の発表は多岐な分野にわたり、その量は多く、また、研究レベルも高い。
　さらに、東日本大震災を受けて開始された「災害時の認知症の医療・ケアの現状と課題の報告」については、精力的に取り組まれ、その報告書を速やかに作成し、さらに、発展させていることは高い評価に値する。
　また、健康格差の視点からの自殺関連の研究成果も評価される。

・全体として目標に応じた成果がみられている

・第一期中期計画の初期段階においては、研究の途中であり、学術成果の報告が不十分であったり未整理な点がみられたが、大震災後に行われた災害時の認知症医療・ケアの課題のように報告書が速やかに作成された課題も含めて、学問的、社会的意義がある成果が積極的に発表されている。学会発表、論文の公表も充実しており、論文賞を受賞した研究もある。目標に向かって学術的知見、成果が着実にあがっていると評価し得る。

３　研究成果の還元	平均３．８点

・いずれの研究成果も適切に市町村、東京都、さらに、東日本大震災の被災地などに還元されており、その貢献は極めて高い。本チームの行政・地域施策への貢献は一定以上あると考えられるが、「期待度」が極めて高いことを考慮すると、今以上の成果の還元が期待される。特に、認知症早期診断・早期対応システムの開発、うつ予防に関しては、社会的な期待感が大変高く、自治体において大きな問題であり、極めて難しい分野であることは確かであるが、更なる具体的な対応策が求められている。

・よく還元されている

・第一期中期計画の当初においては、外部評価委員から、研究成果が具体的に使用され、行政施策などへの反映という形で十分に還元されていないという指摘があったが、研究の進捗に従って地域貢献、社会貢献が認められるようになったと評価し得る。最終年度には、研究の実践が介護予防活動として定着した研究、国の介護予防事業マニュアルに反映された研究など、還元が積極的に行われるに至った。本チームの研究課題は、いずれも社会的必要性や成果への期待が高い。それだけに、今後一層、社会的還元、貢献、普及等が望まれる。

４　今後の展望と発展性	平均４．４点

・中期計画に期待された内容に対して、限られた人員体制の中で、達成していると判断され、そのほとんどの研究の方向性は適切であり、必要性も感じられた。
　いずれの研究内容も妥当であり、発展が予測されるものばかりであり、研究の継続発展を通じた、政策提言が強く期待される。

・中期目標の達成に向けて、研究の方向性は適切であると評価し得る。第一期中期計画期間の研究としては、限られた人員体制の中で着実な成果が上がっている。今後は、研究を発展させつつ、基礎的な研究成果を基にして、実践的、応用的な社会的還元を行い、行政との連携によって地域で活用される方向での研究の展開も期待される。

評点の理由、コメント

●自立促進と介護予防研究チーム

5　総合評価	平均4．33点

・研究テーマである「筋骨格系の老化予防の促進」・「介護予防の推進」・「認知症・うつの予防と介入の促進」という本「自立促進と介護予防」チームにおける研究は、極めて社会的な要請も強く、また、臨床への貢献も含め、その成果の還元を強く期待されている大変重要な研究である。
　研究テーマについて多くの個別研究がある中で、概ね順調に研究は進行し、目標を達成していると考えられた。しかし、個別の研究テーマが多岐にわたることから、更なる発展のためには、それらを統合的に位置づけ、研究をさらに発展させていく必要性も感じられた。

・重要な課題を探究し、成果を上げている。チームの中で取り上げる課題が多いのが多少気になる。課題を絞り、じっくり取り組むことで、さらに研究所ならではの研究、成果を上げていってほしい。

・本チームでは、必要性および重要度の高い課題に対して、独創性の高い研究が行われており、テーマ設定、研究計画ともに妥当なものと評価し得る。外部研究機関、自治体、企業、病院部門などとも活発な連携をしており、年次を追う毎に着実な研究成果があがっている。研究成果の発表も積極的に行われている。研究成果の還元に関しては、本チームの研究成果に対する期待が高いが故に、経過年度の評価時点においては、外部評価委員から不十分との指摘もみられたが、第一期中期計画期間終了までには、成果還元が積極的に行われるようになってきており、今後の一層の展開が望まれる。現状では、研究課題の達成状況に差異が認められる点もあるが、総合的には、重要な課題を適切に研究し、成果があがっていると考えられる。今後は、研究体制が限られていることも考慮し、本チームの主題である自立促進と介護予防の達成に向けて、より効果的かつ実践に有用な成果が得られるよう、研究内容の見直しや再構成も検討し、一層大きな成果をあげることが期待される。

・研究内容は社会的に大きな意義があり、研究も順調に進み、目標を十分達成する成果を上げている。成果に関しては、東京都のみならず、国全体で期待度の大きな問題ばかりで、より一層の社会還元が求められる。特に、「うつ」問題に対しては、他のテーマに比較して一層の取り組みが求められる。

6　評価を終えて

・全般的に大きな問題はないと判断される。
　ただ、限られた人員体制で、膨大、かつ、多岐にわたる研究テーマを質の高い研究として実施し、さらに発展させていくためには、個別研究の統合的な実施や外部機関との更なる連携強化が必要ではないかと感じられた。

・本研究チーム内および社会科学系全体の中で、研究内容の連携や調整を図ることを通して、より効果的な研究成果が得られる側面があるのではないかと考えられる。限られた研究体制の中で、質量ともに充実した研究が実施されていることには敬意を表すが、より効果的に研究を進めるためには、チーム内外の研究の相互関連を明確にし、補完的かつ協力的な連携研究を一層進めることが必要である。たとえば、社会科学系全体のテーマを明確にし、その中に各チーム、各サブテーマを位置づけた鳥瞰的視点からの整理と合意なども有用ではなかろうか。

社会科学系　外部評価委員会　チーム別評定結果

【各5点満点】

●福祉と生活ケア研究チーム

チームリーダー：石﨑達郎

委　員	1　研究計画の創造性・妥当性	2　研究成果	3　研究成果の還元	4　今後の展望と発展性	総合評価
平　均	**4.2**	**3.8**	**3.8**	**3.8**	**3.86**
	5点×1名 4点×4名	4点×4名 3点×1名	4点×4名 3点×1名	5点×1名 4点×2名 3点×2名	

3チーム中　3位

評点の理由、コメント

1　研究計画の創造性・妥当性　　平均4．2点

・研究対象の包括性、研究内容の学際性、研究成果の還元の視点で、個別研究を明確に位置付けており、研究計画は適切に組み立てられている点は高く評価される。
　そして、研究内容を評価すると、その独自性・新規性・必要性は大変高いことがわかる。
　さらに、定期的な会議等を通じた研究進行管理に基づき、特に、病院部門等との十分な連携による研究内容からは、特にその独創性と優位性を伺うことができる。

・生活環境、制度・政策に関わる研究は意義深い。

・本研究チームは、在宅療養支援方法の開発、要介護化要因解明と予測、終末期ケアのあり方を研究テーマとしており、これらはいずれも必要性、重要性の高い課題である。外部評価委員から、具体的テーマ設定や手法には新規性、独創性が不十分な点があるとの指摘もあったが、全体として妥当な研究が行われていると評価し得る。国内外の研究機関、他の研究チームおよび病院部門とも成果につながる連携が行われている。

評点の理由、コメント

●福祉と生活ケア研究チーム

2 研究成果	平均3．8点

・個別の研究内容については、概ね順調に進行していると考えられる。
　学術的な知見のレベルは十分高く、その成果としての学術論文の発表も一定以上ある。また、「ライフデザインノート」なども開発しており、その学術的価値も高く、実践的にも価値のある成果が上がってきている。
　なお、介護保険制度の評価関係については、一定の成果は公表されているが、貴重なデータの解析としては、更なる発展的な研究が強く期待される。

・成果がみられている

・研究成果に課題による差異がある、中期計画の年度別計画と実際の研究報告との関連が不明瞭である、研究途上とみなさざるを得ない研究があったなどの指摘が外部評価委員からみられたが、第一次中期計画の各年次においては成果があがっており、新しい学術的知見も得られており、学会発表、論文公表も行われており、全体として成果が上がっていると評価し得る。

3 研究成果の還元	平均3．8点

・本チームの研究は特に病院等医療機関との連携に基づく研究成果もあり、貴重な、意義深い研究成果が多数出されている。しかし、全体として、個別研究内容で得られた成果は、行政・地域・産業等の施策への貢献・反映という点からはやや物足りない。特に、いずれの研究テーマも、市区町村において大変大きな問題であり、その具体的な対応策が求められている。

・還元されている。

・厚生労働省の介護予防マニュアルへの研究成果の採用、高齢者虐待の手引きの作成、自治体における介護予防体操の普及など、積極的な社会的還元が行われている成果もあるが、外部評価委員から、第一次中期計画の最終年度においても、行政、地域、産業等への施策への貢献、反映という点からはやや物足りない、終末期ケアの在り方研究も研究所内では本チーム独自の課題であり、早急の成果とその還元が強く求められる、との指摘があった。しかし、有疾患患者の老年症候群対策、市区町村による虐待防止支援、要介護状態の重度化、介護者の心身の健康保持、在宅継続困難等に係わる要因の解明、介護保険制度の評価などにおいて、自治体の事業計画の策定に資する提言や助言を積極的に行っていることは評価し得る。本研究チームの課題に関する社会的期待は高いと考えられるため、今後一層の研究成果の蓄積とその還元が求められる。

4 今後の展望と発展性	平均3．8点

・限られた人員体制の中で、中期目標は達成されていると判断された。
　いずれの研究もその方向性は適切であり、必要性も強く感じられた。今後、さらに発展が望まれる研究が多数あり、その発展が強く望まれる。特に、個別に研究が実施されている印象があり、それらを有機的に連携して実施するなど、効率的な研究体制を構築するなどの工夫でさらに研究は発展する可能性があると考える。

・本研究チームの課題は、第一次中期計画の最終年度においても、外部評価委員から、今後の発展性がみえないという指摘もあり、全体として重要性が高い研究テーマであることは認められるが、研究が多岐に亘ることもあって、中期計画の研究、実際に行われている研究、成果が得られ目標が達成された研究、継続すべき研究、新たな枠組みに従って進める必要のある研究などの整理が必要だと考えられる。研究の発展が望まれる研究が多数あるので、内容と方法を検討しつつ、社会的還元を意識しながら研究を進めることが望まれる。

評点の理由、コメント

●福祉と生活ケア研究チーム

5 総合評価　平均3．86点

・「在宅療養支援方法の開発」・「要介護予防の要因解明と予測」・「終末期ケアのあり方の研究」という本「福祉と生活ケア研究チーム」における研究テーマの中の個別の研究は、いずれも大変重要な研究であり、特に当研究所が強く求められる研究ばかりである。
　個別研究がある中で、順調に研究は進行している。いずれの研究も大変興味深い研究成果が得られてきたが、さらなる研究成果を期待したい。

・制度、政策にかかる研究のさらなる発展を期待する。ケアに関わる、量的方法論での探究と、質的方法論で初めて明らかになる側面とをこれからも重視され、当事者の目線を大事にしたケア学を、今後も統合的に追求していってほしい。

・本研究チームの在宅療養支援法の開発、要介護化の要因解明と予測、終末期ケアのあり方の研究は、いずれも興味深く、必要性、重要性の高い研究テーマであると考えられる。外部の研究機関や他の研究チーム、病院部門との連携によって研究が進められ、成果があがっている。研究テーマが多岐に亘っていることもあり、研究の進捗、成果、成果の還元、今後の発展に差異があり、研究チーム全体としてのまとまりにやや欠ける点が認められる。中期計画に準拠して研究を進めるためには、チーム内の研究の整理や各テーマの位置づけの明確化も検討の余地があると考えられる。社会的還元に対する要望が高い課題も多いため、外部評価委員から、現状では還元が不十分との指摘もあったが、今後の発展が期待される。

・研究テーマは、どれも必要性が高いと考えられるが、中期計画内容と必ずしも一致していないように感じられた。チーム全体としての研究テーマの関連性の説明が必要である。研究が進みつつある状況だと思われ、今後の社会での重要なテーマだけに、今後の発展が期待される。

6 評価を終えて

・多岐の分野にわたる研究テーマを限られた人材の中で、精力的に実施し、その成果を着実に公表し、さらに、市町村、都、国に還元していることは特筆に値する。
　今後得られた成果をさらに発展され、広く社会に還元するためには、情報の発信をさらに強化していくことが必要であると考える。成果が上がっていても、その公表、普及等については、その過程に習熟していないと、結果的に、成果があまり上がっていないように受け取られる可能性もある。本研究チームのみならず、広報部門の強化が今後の研究所としての課題であると感じた。

・限られた研究体制の中で、多くの研究を実施され、成果をあげておられることに敬意を表す。中期目標に従って適切に研究を展開することとともに、時代の変化に応じて研究課題と研究方法を見直すことも含めて、多岐に亘る研究課題を整理し、研究チーム内外のテーマとの関連性と補完の可能性を検討するなどを通して、より効果的で影響力があり、実効性の高い研究成果があがることを期待している。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会設置要綱

２２健事第１１７４号
平成22年12月24日制定

（設置目的）

第１条　地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター　東京都健康長寿医療センター研究所（以下「研究所」という。）が実施する研究について、厳正な評価を行い、もって、より効率的・効果的な研究活動を推進し、都民である高齢者のための健康維持や老化・老年病予防に寄与する研究体制づくりに資することを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第２条　委員会の所掌事務は、次のとおりとする。

（１）前条に定める研究の評価を行うこと。

（２）前号の研究評価を実施した後、速やかに、評価結果及びその概要をとりまとめ、必要な意見を付して、センター長及び研究推進会議に報告すること。

（３）その他、センター長が必要と認める事項

（組　織）

第３条　委員会は、次の各号に定める委員会とし、各委員会に委員長を置き、委員長は、委員の互選により選出する。

（１）自然科学系研究外部評価委員会

（２）社会科学系研究外部評価委員会

２　委員長は委員会を招集し、会議を主宰する。

３　委員長に事故がある時は、あらかじめ委員長が指名した委員が委員長の職務を代行する。

（構　成）

第４条　各委員会は、次の各号に掲げる評価委員（以下、「委員」という。）５名以内をもって構成し、委員はセンター長が委嘱する。

（１）学識経験者　３名以内

（２）一般都民を代表する有識者又は老年学に造詣が深い者　１名以内

（３）行政関係者　１名以内

２　各委員会は、それぞれの委員の過半数の出席により成立する。

３　委員長は、必要と認めるときは関係者に委員会への出席を求めることができる。

４　委員長は、必要と認めるときに部会を設けることができる。部会長は委員の中から委員長が指名するものとする。

（評価項目及び評価視点）
第５条　評価項目及び評価視点はおおむね次のとおりとする。
（１）研究計画の独創性・妥当性（研究内容の独創性・新規性・必要性、病院や他チームとの連携など総合力）
（２）研究成果（目標の達成度、学術的な知見、成果の発表）
（３）研究成果の還元（行政施策・地域・産業への反映、提言、審議会への参画）
（４）今後の展開と発展性（中期計画達成に向けた研究の方向性や内容、研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性）

（公　開）
第６条　委員会及び委員会に係る資料、要点記録（以下「資料等」という。）は公開する。ただし、委員長あるいは委員の発議により、出席委員の過半数で決議したときは、委員会又は資料等を公開しないことができる。
２　委員会及び資料等を公開するときは、委員長は、必要な条件を付することができる。

（評価結果の公表及び開示）
第７条　センター長は、評価結果の概要を公表する。
２　センター長は、研究チームの代表者から求めがあった場合、研究チームの代表者に、当該研究チームの行う研究に係る評価結果を開示することができる。ただし、委員会で決議のあった事項については、開示しないことができる。

（庶　務）
第８条　委員会の庶務は、経営企画局事業推進課において処理する。

（雑　則）
第９条　この要綱に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は理事長が定める。また、委員会の運営に必要な事項は委員長が別に定める。

附　則
この要綱は、平成２２年１２月２４日から施行する。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会実施要領

２２健事第１１７４号
平成22年12月24日制定

（目　的）

第１　この要領は、東京都健康長寿医療センター研究所（以下、「研究所」という。）外部評価委員会設置要綱の規定に基づき、研究の外部評価の実施について必要な事項を定めることを目的とする。

（評価の対象）

第２　研究評価は、研究所で行われるチーム研究・受託・共同研究等による研究を対象とする。

（評価の実施）

第３　研究評価は、原則として、毎年度実施するものとする。

（評価委員及び評価の方法）

第４　研究評価は、次の方法により行う。

２　評価は、外部評価委員会の委員により、研究報告書等により行う。

３　評価の実施にあたり、外部評価委員会は研究に関するプレゼンテーションを研究部長等に行わせることができる。

４　当分の間は、研究進行管理報告会も併せて行うこととし、理事長、センター長、経営企画局長、副所長等を参画させることができる。

（評価基準）

第５　研究評価の評価基準は、評価項目ごとに別に定める。

（評価結果の活用）

第６　センター長は、研究評価の結果を主に次により活用する。

（１）研究チーム・テーマの再編

（２）研究目的、研究計画、研究体制などの設定

（３）研究資源の配分

（４）研究所のビジョンや重点研究、プロジェクト研究の再構築

（雑　則）

第７　この要領に定めるもののほか、外部評価の実施に必要な事項は、研究推進会議の議を経て、センター長が定める。

附　則

この要領は、平成２２年１２月２４日から施行する。